

アンドレ・ピエートル著 岡田純一訳

## 『マルクス体系の再検討』

〔理想社、昭和三四年一月二五日刊、A5版、三三五頁、五八〇円〕

吉 田 静 一

マルクス主義の「危機」あるいは「再検討」ということが言われはじめてから今日まで、もうかなりの時日が経っている。もっとも、マルクス主義の深刻な「危機」といわれるものは、なにも今日をはじめて生じたものではなく、それは、かつてあのファシズムが抬頭しつつあった一九二〇年代の終りから三〇年代にかけて一度あり、そのさいには全世界的規模での「イデオロギー論」論争が生み落されたとわたくしはつねづね考えているが、しかし、今日のそれはもちろんかつてのものとは情況を異にしている。今日のマルクス主義の「危機」は、言うまでもなく、あらわなかたちでは、マルクス主義＝共産主義陣営内部における政治的諸事件——とくにスターリン主義批判、東ドイ

ツ、ポーランド、ハンガリーにおける政治的諸事件をその直接的な契機にしており、マルクス主義者自身が深く自覚しつつあるところに、その特徴を見出すことができるであろう。もとよりマルクス主義運動の「危機」は必ずしもマルクス主義の「危機」をもたらずとは限らないのであるが、しかしマルクス主義が理論と実践の統一をめざす一つの緊密な世界観である限り、それは運動の「危機」が体系の「再検討」をもたらず性質を、本来的にもっていたといえるのである。

このような雰囲気なかで、ピエートル『マルクス体系の再検討』が訳出されたことは、それ自体一つの興味深い事実である。もともと本書のタイトルは、『マルクスとマルクス主義』で

## 『マルクス体系の再検討』（吉田）

あり、『マルクス体系の再検討』という訳書名は、訳者によってつけられたものなのであって、そこに訳者に潜在する問題意識をうかがうことができるのであるが、この訳書名は却って本書の内容を指示するうえに適切であったかもしれない。

本書は、つぎのような構成をとっている。序章 マルクスとエンゲルス。彼らの環境と時代。第一部 マルクス主義哲学。

第二部 マルクス主義経済学。第三部 マルクス主義革命。結論 マルクス主義の逆説。これらの各部、章、節は、きわめて連絡よく構成されており、叙述は著者の意図に沿ってすすめられ、読者を著者の結論にさせたいとむように組まれている。その手腕はみごとである。しかし、それにもかかわらず、読むものに迫力を一向に感じさせないのは、どうしてであろうか。

著者は、「はしがき」で、「本書は、マルクス主義の本質的な局面を明らかにし、ひとがあまりにもしばしば曖昧さと感情とをもちこみがちな問題に、最大限の明瞭さと客観性をもたらそうとはかるものである」とのべている。しかし「マルクス体系」を客観的に「再検討」するとは、どういうことであろうか。およそ一つの思想体系を客観的に分析することが有効であるためには、それによってこの思想体系からあたらしい問題が

抽出され、それがあたらしい視角から提起されていなければならない。ところが著者は、マルクスの思想体系そのものについて、これをきわめて手ぎわよく横断的に叙述するにとどまっている。もちろんこの叙述に問題がないわけではない。しかしいまはそれをおくとしても、この叙述はわが国のマルクス研究の水準に比するならば、およそ平板で、決して問題意識的であるとは言い難い。著者もおそらくそこに問題をいだいているのではあるまい。むしろ著者の問題関心は、「実現された革命」が、マルクスの思想体系の嫡出子であるかどうかにあるのである。とするならば、さきの客観性も、それがいかなる帰結をもたらすかというところから判断されなければならない。

この小冊子のなかで、マルクスの思想体系から現在の社会主義諸国の状態までも包括して叙述したことは、おそらく本書の一つの特徴であろう。しかし、実はここに問題がある。それがもっとも鮮明にあらわれているのは、「結論 マルクス主義の逆説」においてである。著者は、一方でマルクス主義があらゆる分野、すなわち、哲学、政治学、経済学の分野における近代の最大の革命としてあらわれたことを一つの事実として認めながら、他方では、「マルクス主義は体験によって欠陥をあらわに

してきたこと、しかもそれは、自らそれ自身の建設を通して、そのテーゼの大部分を否定してきた」ことも、一つの事実として認める。つまり、経験的事実によれば、資本主義は決して弁證法的発展をとげてこなかったし、共産主義は、賃金の平等、国家の死滅、分業の廃棄、「あたらしい人間」の到来といった原則の約束を少しも履行してこなかったというのである。それどころか、社会主義のもとにおいては、資本主義が必然的に生み出す人間の自己疎外は克服されず「あらたな技術的、経済的、政治的、精神的疎外」が生じつつあるというのである。したがって、「実現された革命」はマルクスの思想体系から距たること遠いものであり、逆にそうではないとすれば、マルクス主義の前提そのものに欠陥を見出さざるをえなくなる。おそらくこれが著者の最大の論点であろう。そしてこれが、著者のいう客観性の帰結なのである。ところで、この論点からわれわれは、何らかのあたらしい問題をとり出すことができるであろうか。われわれが直ちに気づくように、こうした視角からするマルクス主義批判は、すでに言い古された類のものである。かつてのそれは、たしかに社会主義を否定する立場からなされたものであり、そのゆえに自らきわめて政治的、感情的な態度をと

『マルクス体系の再検討』(吉田)

もなったものであった。したがって、まさにそうした態度を拒否しようとする著者を、かつてのマルクス主義批判者と同一視することは酷であろう。しかしそれにもかかわらず、同じ帰結をしめしているのは、どうしたわけであろうか。おそらくそれは、かつての批判者も本書の著者も同じ平面上にたっているからではないだろうか。現実の社会主義諸国の状態からの、マルクス思想体系への類推、でなければマルクスの思想体系からの、現実の社会主義の分離がそれである。さきほどわたくしは、本書が読むものに向迫力を感じさせないと書いたが、その原因はここにあるのではあるまいか。ということは、本書が、マルクス主義の「危機」のなかにあって、それに内在しつつそのなかからはげしい問題提起を少しもおこなっていないことでもある。マルクス主義にたいして批判的な著者に、このことをもとめるのは、どだい無理なはなしである。しかし、「再検討」ということのなかには、それが鋭くあろうとすればするほど、本来そうしたことをもとめる性質が含まれているのである。

とわたくしは、現在の社会主義諸国を全面的に認めなければならぬとするものではない。逆に「現代マルクス主義」の必要性を感じているものである。ただし、現代マルク

## 『マルクス体系の再検討』（吉田）

「主義」は、この著者の態度と業績をうけついで構築されるものでは決してないであろう。

x x

多くの論点にわたって批評したいと思いつながら、ごく限られた論点にしかふれられなかったことを、本書の訳の労をとられた訳者に、おわびしておきたい。訳者の解説は、「さいきんのフランスにおけるマルクス研究について」ふれられたもので、きわめて有益であった。しかし、マルクス主義者の研究にふれるところ少いのは、惜しまれる。さいごに訳文について一言するならば、明らかに誤訳と指摘できる箇所が二、三散見されるのは、たいへん残念である。それについていちいちふれる余裕はないが、常識的なものとしては、トンブソンはトムスンであろうし、プレカーノフはプレハーノフであろう。その他の箇所とともに再版の折にでも訂正していただければ幸いである。